

いなりじんじゃ かぐらでん 《稲荷神社と神楽殿》

ごこくほうじょう しょうばいはんじょう
五穀豊穰・商売繁盛を司る稲荷神を祀る稲荷神社。家人はここで精神を浄め、家内安全を祈った。社は、総檜やしろに銅板葺きの瓦葺き。手前の水屋は鉄板葺きとなっている。左右に鎮座する眷属の靈狐は、向かって左が宝物を守る男狐、右が子狐に乳を与える女狐の姿をしており、子孫繁栄しそんはんえいを意味している。

毎月の初午はつうまの日には「赤のご飯」(うるち米と小豆)を供える。

毎年3月(旧暦2月)の初午祭礼では、鳥居の両脇に幟のぼりを立て、表門おもてもん(門長屋)や中門ちゅうもん、水屋みずやなどに赤い提灯を下げ、屋敷の黒塀じぐち あんどんには地口行灯を飾り、神楽殿を開く。戦前は参道を通って上花輪村の人々が宵宮祭りに集まりお囃子はやしを奉納する盛大な祭礼が執り行われた。

供物は、宵宮には油揚げと豆腐を、当日は、朝、海の幸・山の幸・塩・水・米を、昼に赤のご飯・豆腐の味噌汁・鱈こぶ・おぬっぺ(高梨家に伝わるのっぺい汁)・ネギぬた・塩鮭の御膳と赤飯・餅を供える。また、藁苞わらづとに赤飯と酢みつきり(大豆と大根おろしの酢和え)を入れ、土地神様に供える。

左手の神楽殿は、28代の病氣平癒を祝い明治10年代に建てられたもので、傘を広げたように造られた屋根は「扇垂木おうぎたるき」と言い、銅板本葺き(瓦棒葺き)で、檜さんの棧が入っている。